

(14) にんじん

(ア) 病害

病害虫名及び 防除時期	防除方法及び注意事項
軟腐病	耕種的防除 1. 連作を避ける。 2. 排水をよくする。 薬剤防除 1. 茎葉散布
黒葉枯病 7月上旬～8 月上旬	耕種的防除 1. 肥料切れしないようにする。 薬剤防除 1. 茎葉散布（発病初期から10日毎に散布する。） （1）特別栽培農産物表示ガイドラインで規定されている「節減対象農薬」以外の農薬であるポリオキシシン複合体剤は化学合成農薬の代替剤として効果が高い（平成23年普及奨励並びに指導参考事項151ページ参照）。
斑点病	薬剤防除 1. 茎葉散布
乾腐病	耕種的防除 1. 土壌の排水性改善を行い、排水性を悪化させる作業（多水分時の作業等）を避ける。 2. 高うね栽培は被害軽減効果がある。 3. 収穫適期となり次第早めに収穫する（は種後60日以降に土壌の過湿状態にであうと、その20～30日後くらいから発病株が増加し始めるため）。

(イ) 害虫

病害虫名及び 防除時期	防除方法及び注意事項
ヨトウガ	薬剤防除 1. 茎葉散布
アブラムシ類	薬剤防除 1. 茎葉散布
ネキリムシ類	薬剤防除 1. 土壌表面株元処理
キタネグサレ センチュウ	商品価値に影響を与える線虫密度 1. 土壌25g当りの検出数は5頭とする。

病害虫名及び 防除時期	防除方法及び注意事項
は種前	<p>2. 指標植物を利用した簡易把握方法:栽培予定ほ場の土壌を鉢に取り、ごぼうを室内等で2か月間栽培し、寄生指数1以下の場合には栽培可能である。</p> <p>生物的防除</p> <p>1. 対抗植物を栽培する。 (1) えん麦野生種「ヘイオーツ」、又はマリーゴールド「アフリカントール」 (2) 栽培にあたっての注意事項はだいこんの項を参照する。</p> <p>2. 増殖抑制効果のある作物には「てんさい」があるが、本センチュウは多犯性であり、作物の組み合わせによっては輪作を守っても多発することがあるので注意する。</p> <p>薬剤防除</p> <p>1. 土壌灌注 2. 全面土壌混和</p>
キタネコブセンチュウ は種前	<p>商品価値に影響を与える線虫密度</p> <p>1. 土壌25g当りの検出数は2～3頭とする。 2. 指標植物を利用した簡易把握方法:栽培予定ほ場の土壌を鉢に取り、ごぼう又はにんじんを室内で2か月間栽培し、寄生度1以下の場合には栽培可能である。</p> <p>耕種的防除</p> <p>1. イネ科等、非寄主作物を組み入れた4年以上あけた輪作を行う。</p> <p>薬剤防除</p> <p>1. 土壌灌注 2. 全面土壌混和</p>

(ウ) クリーン農業技術(病害虫防除関係分)(にんじん)

- 発生モニタリングによる効率的防除
 - ・見歩き調査による黒葉枯病の初発観察
- 被害許容水準の活用
 - ・栽培前の土壌検診又は簡易指標植物の栽培を利用した線虫密度の把握による防除要否の判断
- 耕種的防除
 - ・黒葉枯病対策として連作の回避、適正な施肥
 - ・線虫密度低減対策として、前作に対抗植物(えん麦野生種やマリーゴールドなど)を栽培
 - ・乾腐病軽減対策として、排水性改善、適期収穫

※栽培に当たっての留意事項

線虫密度が極端に高いほ場では、対抗植物を栽培した場合でも十分な効果が得られないので、注意すること。

※注釈

●黒葉枯病防除対策

特別栽培農産物表示ガイドラインで規定されている「節減対象農薬」以外の農薬であるポリオキシン複合体剤は効果が高く、化学合成農薬の代替剤として有効である。

●乾腐病軽減対策

乾腐病はは種後 60 日目以降に土壤が過湿状態であると、その 20～30 日目から発病株が増加するため、収穫適期になり次第早めに収穫する。また、土壤水分が高いほど発生が増加するため、土壤の排水改善や高畦栽培は被害軽減効果がある。

●線虫密度低減対策として、前作に対抗植物(えん麦野生種やマリーゴールドなど)を栽培

○キタネグサレセンチュウ

・土壤健診 要防除水準： 5 頭以上/25g 土壤

検診法

①土壤サンプリング(作付け予定地より 4、5 箇所サンプリング)

②普及センター等で調査

・指標植物健診 要防除水準： 寄生度 1 以上

検診法

①土壤サンプリング(作付け予定地より 4、5 箇所サンプリング)

②サンプリングした土壤を 15 cm ポリポットに充填し、ごぼうを 4、5 粒は種

③ 2 か月程度生育させる(本葉 2～3 枚)

④堀取り根を観察調査

○キタネコブセンチュウ

・土壤健診 要防除水準： 2 頭以上/25g 土壤

・指標植物健診 要防除水準： 寄生度 1 以上

線虫の寄生度

寄生度(階級値)	ネコブセンチュウ(各作物共通)	ネグサレセンチュウ		
		ごぼう	だいこん	にんじん
0	こぶが全くなし	黒変が全くなし	白斑・褐点が全くなし	褐点が全くなし
1	コブがわずか	根の一部が黒変 (注意すると認められる)	白斑・褐点がわずか	褐点がわずか
2	コブが中程度(散見)	根の数か所が黒変(一見して識別できる)	白斑・褐点が少ない	褐点が少ない
3	コブが多数	根の半分程度が黒変	白斑・褐点が全体に散見	褐点が全体に散見
4	コブが極めて多数(密集)	根の全体が黒変	白斑・褐点が全体に多数	褐点が全体に多数

要防除水準を超えたほ場では、対抗植物(マリーゴールド、えん麦野生種)を3か月以上栽培してからにんじんを作付ける。は種量は、マリーゴールド(アフリカントール)は1.5kg/10aとえん麦(ヘイオーツ)は15kg/10aが必要である。なお、対抗植物のすき込みは適期に行い、腐熟期間は十分にとる必要がある。後作緑肥としてはえん麦野生種が有効で、キタネグサレセンチュウ密度をごぼう・にんじんに対する被害許容水準である5頭/25g以下にするために、えん麦野生種を8月10日頃には種し、すき込み時の生育量は3,000kg/10a(草丈で80cm程度)を確保する。